

「千葉氏を

語る」だより

会報誌第19号
千葉氏を語る会
事務局
発行日
令和7年
3月15日

『千葉介常胤と鎌倉幕府創設』

丸井敬司

(本会副会長・文学博士・

元千葉大学講師・

元千葉市立郷土博物館館長)

鎌倉幕府の初代将軍であった源頼朝から「父」と呼ばれていた千葉介常胤は、桓武天皇の系統を引く関東の有力武士で、その祖先は桓武天皇の玄孫・平良文とされています。常胤の父大権権介常重常重は後に千葉郷に移住し千葉氏と称す(の子として上総国の大権で生れました。生れた年は、元永元年(一一一八)とされています。

大治元年(一一二六)六月、常胤が九歳の時、常胤の父常重は大権から、下総国千葉郡千葉郷に移り、新たな武士団を形成しましたが、常重は、長承四年(一一三五)、

突然、家督と所領を嫡子の常胤に譲り、隠居しました。この時、常胤は、若干十八歳の青年でした。

常重の突然の隠居の理由は、相馬御厨を巡って常胤の父常重と下総国司藤原親道の間で税金の有無をめぐる争いが起きた事によるものでした。

相馬領は本来、常重の叔父、上総常晴の所領でしたが、天治元年(一一二四)常重は常晴の養子となる事でこの所領を獲得しました。常重は、この所領を天治元年(一一二四)、伊勢神宮外宮に寄進し、相馬御厨が成立しました。しかし、その後、相馬御厨成立以前の土地の税金が未納のままとなっており、それが親道に発見され、問題となりました。

これが争いにまで発展したのは常胤が千葉家の家督を継承した直後

の保証二年(一一三六)のことでした。突然、下総国司の藤原親道は、常重を捕らえて下総国府内の牢屋に抑留しました。この時、常重は、相馬御厨と橘郷(小見郷、現在の香取市小見川町)の所領の譲渡状を提出することで釈放されましたが、後、常胤は、未納の税金を弁済し、相馬御厨の領有権を取り戻すことに成功します^①。

しかし、今度は頼朝の父源義朝が、相馬御厨の割譲を要求してきました。この時、常胤は、義朝との争いを避けて義朝の要求に応じ、この権利を義朝に割譲し、義朝の家臣となる事によって、この難局を切り抜けることに成功します。しかし、「平治の乱」で義朝が平清盛に敗れると、相馬御厨の管理権は、平家方であった隣国の佐竹氏に奪われました。

こうして常胤は、心血を注いで確保した相馬御厨や相伝の所領であった橘郷の領有権を失いましたが、治承四年(一一八〇)、常胤が六三歳の時、源頼朝が、伊豆で挙兵し、石橋山の戦いに敗れて安房に逃れて来ると逸早く頼朝に参向し、源平合戦・奥州藤原合戦や鎌倉幕府の創立に大きく貢献しました。

この功績で常胤は、奪われた相馬御厨や橘郷の所領を取り戻すことに成功しただけでなく、上総介広常の滅亡後は、上総国内と下総国内の上総氏の所領を獲得し、更に源平合戦や奥州合戦の恩賞で、全国に二〇数方所といわれた広大な所領を獲得し、東国政権内では最大の武士団に成長しました^②。また、同時に、頼朝の片腕の一人として鎌倉幕府創設期の諸政策の確立にも重要な役割を果しました。

千葉介常胤の亡くなった年は『吾妻鏡』では建仁元年(1201)3月25日とされているが、『本土寺過去帳』では正治二年(1200)二月、83歳。『平朝臣徳嶋系図』では正治二年二月二日、83歳。となっており、正治二年二月二日が正しいものと思われる。これを逆算するといずれも生まれた年は元永元年(1118)となります。

① 現在の柏市、我孫子市、相馬市、一帯。

② この時、橘郷は戻りませんでした。

千葉胤通と国分氏について

(会員) 日向安昭

胤通は、千葉常胤の五男で、父常胤から、下総国分寺領であった国分郷(市川市)を与えられた。

国分寺の地は下総国府に隣接しています。国府には京から赴任した国司やその代官である目代の下に、国衙(国府の役所)の業務を行う「在庁官人」役人達がいた。千葉氏は下総国府の在庁官人のトップとして「権介」に任じられた。

千葉氏は在庁官人として国府に出仕するため、本領千葉荘のほかにも国分郷を所領し、館を設けた。この地には律令国家が造営した国分寺があり、館はその寺内にあったとされています。

その国分郷を領し、国分を名字とすることは、胤通が国衙権力と深く結びついていたことを示しています。その後胤通は香取社領や大戸庄を領しても、国分を称し続けたのは、これは下

総国の一宮として祭祀や造営に国衙が深く関わった香取社に進出するためには、国衙権力と結びつきが重要な役割を果たしたためと考えられています。

頼朝の進出によって

頼朝が鎌倉政権を樹立し、父の常胤が御家人筆頭としての地位を得ると、胤通も父や兄弟と共に行事や合戦で重要な役割を担った。文治五年(一一八九)に奥州藤原氏攻めが行われ、常胤は東海道大將軍として参加した。常胤は恩賞を真つ先に拝領したが、子息たちも奥州各地に拝領を与えられ、東北各地で千葉氏が繁栄するきっかけとなった。胤通の子孫は宮城県南部に勢力を伸ばして、千代城(仙台城)を居城とし、後に伊達氏に属し、奥州国分氏になったと伝えられる。

鎌倉・南北朝の国分氏

平安時代末期、常胤が下総の大部分の地頭職を受けた後、胤通は常胤から香取神宮領大戸庄香取郡周辺の香取神領の地頭職を譲られて、新たに大戸庄に館を立てて移り住んだと思われる。香取社に移った後の市川の国分

寺領の国分氏の活動記録はほとんど見当たらない。わずか「香取文書」や「千葉系図」「千葉大系図」などから詠み取るほかないといわれています。

胤通の嫡子常通は、市川の国分郷に残った。

胤通の次男親胤は大戸庄の大戸郷、胤通の三男有胤は村田郷、四男常義矢作郷を領した。

これらの土地は、大須賀氏、神崎氏、東氏領と隣接し、国分氏は彼ら千葉氏一族と関わりを持ちながら発展していった。

「大戸庄矢作領主」となった常義の流れが実質的に国分氏を代表とする家となる。常義の跡を継いで大戸庄矢作村を支配した常義の嫡子・胤実は、仁和二年(一二四一)の千葉介頼胤の家督相続に際して、その後見人となり、千葉本宗家を支える重職についている。

室町・戦国期の大戸庄

応永年間(一三九四〜一四二八)大戸庄は南方と北方に拠点が分かれます。(資料2地図参照)南方は、鵜崎の大崎城を拠点に、北方は本矢作の矢作城を

期の大戸庄国分氏の系譜(資料1系図参照)室町後期の根拠地は大崎城・矢作城

国分本宗家の国分胤盛―胤盛―胤相(胤景)―朝胤

国分氏と香取社の関係

国分胤以後の国分一族関係の残存する寄進文書を見ると、観福寺と香取社に関する物で、観福寺の知行地はその寺周辺に大方限定されていた。また光福寺・大龍寺・興徳院などの寺も鵜崎・与倉・堀籠村内にそれぞれ寄進安堵を受けている。香取社に対して国分氏が寄進・安堵している土地は小野川流域の香取神領葛原牧内の南部地域。国分氏の勢力基盤は大戸庄及び隣接する香取神領内三村(鵜崎・与倉・堀籠)に限定されている。その周辺地域(津宮・佐原・多田・返田)などの香取社領内や木内庄内などの諸村には、千葉氏直臣の多田一族などの新興勢力が成長して、国分氏の進出が難しい状況になっていると考えられます。

(以下5ページへ続く)



―千葉氏顕彰会の主な活動

■定例講演 3月9日(日)

午後1時30分～3時

場所 千葉市コミュニティセンター

―6階(千葉市役所前)

演題 千葉氏の城郭と変遷につ

いて

講師 遠山成一先生

(千葉市郷土博物館)

■慰霊祭と定例講演

6月1日(日)

講師・演題未定

以上、今年度上期の千葉氏顕

彰会の活動です。

―千葉市の歩みと都市アイデン

ティティ推進室の取り組み

「千葉開府九百年について」

今後の取り組み

① シンボル事業

「記念式典」「千葉九百年

祭り」「記念パレード」

「記念モノユメント」

「千葉国際芸術祭」

② ひとつづくり事業

「学校での一斉事業など」、

「若者の海外派遣」、「起業家

海外展開実践研修」

③ 文化・スポーツ事業

「千葉市美術館企画展」、「千

葉開府九百年サイクリング・

ウォーキング」

「記念スポーツイベント」、「記

念ラジオ体操」

④ 歴史関連事業

「郷土博物館展リニューア

ル」、「郷土博物館特別展」

「千葉氏関係資料集修」

「千葉氏関連遺跡の発掘」、

「いのはな亭のリニューアル」

事務局からお知らせ

★「千葉氏を語る会」の第十一回総

会と記念講演会を、来る6月7日

(土)に催す予定です。会員の皆様へ

は改めて詳細をご案内しますが、

是非参加ください。

★運営役員を募集！

会員の皆様へ、運営参画への呼びか

けです。

「千葉氏を語る会」は、当面

は、来年2026年の「千葉開

府九〇〇年」へ向けて千葉市の

取り組みに連携しながら活動し

て参ります。「：語る会」は今

年で結成11年目を迎え、現在

その運営はボランティアで参画

する役員が担っています。月一

回の役員会で行事の企画調整を

話し合い、月例の「勉強会」・

その他イベントなどの実施、こ

の会報の編集・発行、ホームペ

ージでの情報発信など、様々な

事務や作業をこなしています。

このように「千葉氏を語る会」

の活動を展開していくために

は、運営役の人員が未だに十分

ではなく、新たな仲間を求めています。

パソコン等のスキルがあれ

ば、それに越したありません

が、苦手でも大丈夫です。ボラ

ンティア精神をもつやってみよ

う」という方を大いに歓迎しま

す。

「：語る会」の運営に関心のあ

る方は是非：現運営役員にご一

報ください。

心からお待ちしています。

★発表者・記事を募集！

会員の皆様へ、月例の「勉強会」での

発表者・年2回発行の会報への投稿

を募集します。

千葉氏や房総の中世史について興

味を持ち、学び：その成果をまと

めていませんか？会員の方で、そう

いった成果を披露する場として、

「勉強会」や会報を活用ください。

関心のある方は是非：現運営役員

にご一報ください。

集後記 編集子

会報誌十九号をお届けします
今回号では丸井先生の記事と
(会員)日向さんと西川さん
の投稿記事を掲載しました。